



市立札幌新川高等学校

齋藤 菜奈子 先生

オンライン英語教員研修についての一考察

～文部科学省のプログラムに参加して～

第1章 序論

第1節 本稿の目的

本稿では、私が令和2年度に参加した文部科学省が主催する中・高等学校の英語教員向けのオンライン研修事業の概要を説明し、それを通じて得た学びと気づきを整理する。

第2節 研修の目的

この研修は、正式名称を文部科学省令和2年度オンライン・オフライン研修実証事業(中・高等学校教員向けプログラム)といい、研修実施団体のケンブリッジ大学出版株式会社(CUP)により、中・高等学校教員の英語指導力向上を目的として実施されている。今年度は、コロナ感染拡大予防の観点から、オンラインのみで開催された。研修開催については、札幌市教育委員会から管理職経由で英語科教員に告知され、参加は任意である。

第3節 研修の期間と形式

研修期間は表1の通り8月から翌年1月までの半年間である。参加教員は、この期間に、Zoom を利用した集合研修1回、チュートリアル(相談会)2回と、オンラインセミナー(Webinar)4回に参加し、CUP の e-learning 学習管理システムである The Cambridge Learning Management System (CLMS)を使用した自学自習、及びポートフォリオ2回の提出が求められる。

表1 ケンブリッジ教員研修 プログラム概要【全体スケジュール】

時期	研修内容		*希望者のみ
8月	登録とアンケート 集合研修 Online Training Event ポートフォリオ 1-2		
9月	チュートリアル① オンラインセミナーWebinar 9/30 15:30~ 10/2 19:00~ ポートフォリオ 3-5	自学自習コース	*オンライン授業用オンラインセミナー Webinar ① 9/1 16:00~ ② 9/3 16:00~ *グループ交流 Buddy system
10月	オンラインセミナーWebinar ポートフォリオ 6-7		
11月	オンラインセミナーWebinar ポートフォリオ 8-10 ポートフォリオ添削		
12月	オンラインセミナーWebinar ポートフォリオ 11-13		
1月	チュートリアル② ポートフォリオ 14-16 アンケート		

(出所) Cambridge University Press (2021)



第4節 研修の特色

本研修の特色は、Webinar とオンライン対面研修(集合研修とチュートリアル)である。これらは平日夜や週末に開催日時が設定され、インターネットとスマートフォンやパソコンを使用し、どこからでも参加することができる。また、研修は全て英語で行われるため、教員の英語力向上に寄与する点、学んだ内容やタスクをそのまま英語の授業で実践可能な点がメリットである。Webinar の当日、都合で参加できない場合は、後日オンデマンド方式で講義の動画を視聴することが可能である。

オンライン対面研修と自学自習の研修がブレンドされているため、参加者は学習時間をフレキシブルに設定できる。また、質問には、電子メールで講師が対応する体制が整っており、遠隔ながら安心して学習できる。

第5節 研修で期待できる効果

本研修は、教員の英語力を高めること、および中・高等学校の現場における ICT 設備の充実と緊急事態に備え、ICT を授業で活用する技術を習得することが期待できる。受講する立場からオンラインによる指導方法の知識と経験を積むことができることも、この研修の利点である。

第2章 研修の内容

第1節 本章の概要

本章では、当研修の内容を、集合研修、チュートリアル、講義型オンラインセミナー(Webinar)、自学自習(CLMS)、ポートフォリオの順に説明し、その中で私が得たものを述べる。

第2節 集合研修

第1項 集合研修の概要

集合研修の参加の日程は、1日に5時間集中的に学ぶか、または3日間に分散して参加するか、2パターンから選ぶことができる。筆者は1日集合型研修に参加した。講師はベトナム在住のポルトガル人で、全国の中・高等学校教員約15名が参加し、運営のスタッフは実施団体のCUPがあたった。Zoomを使用した講義の他、自己紹介、グループディスカッションがあった。ディスカッションではブレイクアウトルームにおいて3~4名の少人数で話し合う機会が複数回設けられていた。以下、プログラムの進行順に内容を略説する。

第2項 自己紹介

自己紹介と研修プログラム全体のオリエンテーションで研修の幕が上がった。自己紹介では、鹿児島県と茨城県の中学校の先生と同じグループになり、担当する学年、英語の指導で力を入れている点や強化したいスキルについて話し合い、アイスブレイクとしても役に立った。この中で普段なかなか話す機会のない中学生の英語指導について教えてもらい、高校一年生の教科指導に新しい観点を心得て大変勉強になった。

第3項 スピーキングとライティング指導の講義

1) 講義とチャットボックス

スピーキングとライティング指導の講義は、画面共有機能により講師のパワーポイントの資料を見ながら授業が進められた。講義内容は、後日それぞれの参加者が課題として講師に提出するポートフォリオの中身に沿ったものであった。講師は、CUP教材に掲載された英文や言語活動について、画面を共有しながら解説した。具体例を見ながら講師の解説を聞いたので理解の助けになった。講義中はチャットボックスを使用し、講師や参加者同士でコミュニケーションを取ることが可能であった。筆者から、講義中の気付きを講師にメッセージすると迅速に返答があった。チャットボックスを利用して講義中でも講師とパーソナルなコミュニケーションを取れることは、対面研修にはないメリットと実感した。

2) スピーキング指導の3つの活動

スピーキング指導では3つの活動を行なった。第一に、「正確さ」、「流暢さ」を重視したスピーキング指導の違いについて、提示された具体的な活動例を参考にしながら、自己紹介と同じ3~4名のグループで話し合いをした。



第二に、「言語」に焦点を当てたパターンプラクティスではなく、生徒の既存の知識を使わせ、自由な発想や活発なコミュニケーションを促す「流暢さ」を伸ばす指導例について学んだ。

第三に、教科書に掲載されている言語活動を工夫し、「流暢さ」を育成する活動に変える指導例について話合った。今回の研修で提示された CUP の教材は、コミュニケーションを重視したインタラクティブなタスクが豊富に掲載されている。このようなスタイルの、オールイングリッシュの教材が増えると、教員が「言語」活動だけではなく「内容」や「意味」に焦点を置いた指導により多くのエネルギーを注ぐことができるであろう。

3) ライティング指導力の向上

ライティング指導力の向上のために、「正確さ」や文法を重視する練習ではなく、生徒がライティングの内容を主体的に決める指導例や、様々な目的の英作文を通じてコミュニケーションを取ることで「流暢さ」を促すタスクについて学んだ。

第3節 チュートリアル

第1項 チュートリアルの形式

チュートリアルは、Zoom を用いてオンラインの対面形式で1時間行われる、少人数生の研修であり、計二回参加する必要がある。筆者が参加した一回目のチュートリアルでは、担当の講師(チューター)から、6名の参加者に対し、今後の研修スケジュールや、各自で取り組むポートフォリオ記入に関する確認が行われた。集合研修の参加者とは違う、初めて会うメンバーであったため、ここでも自己紹介が行われた。

第2項 チュートリアルと Buddy

第一回のチュートリアルで、希望者には Buddy が決められた。グループ交流 Buddy system は、自分のパートナーとなる参加者との、協働学習である。筆者の Buddy は長崎県の中学校教頭であり、ブレイクアウトルームにおいて、自己紹介や意見交換をした後は、電子メールで連絡を取り合うこととなった。Buddy system によって、全く違う環境で仕事をする先生と情報交換することは、互いのモチベーションを上げ、一人で学習する不安を減らす点で意義がある。

第3項 Kahoot の活用

今後の研修スケジュールに関する確認は、Kahoot を使用して、クイズ形式で行われた。例えば、「ポートフォリオの締め切りはいつ?」という質問への回答を選択肢から選び、答えがわかると、正解者にはポイントが付与され、即座に各参加者の合計ポイントや参加者中の順位を知ることができる。Kahoot を使用することができなかった数名の参加者は、チャットボックスに回答を記入することで全員が参加した。バックアップの体制があると、参加者にとっては心強く、講義の進行にも影響が出ない。自分がオンライン研修を実施する側になった際に、取り入れたい。

第4節 講義型オンラインセミナー(Webinar)

45 分間の参加必須 Webinar が、9月から12月の間、毎月二度開催された。同じ内容の講義が、違う日時で二度行われる。リアルタイムで参加できない場合は、後日オンデマンドの動画にアクセスすることが可能である。9月は「意味伝達に焦点を当てたタスク」、10月は「発信のための語彙指導」、11月は「生徒の学習成果の評価とフィードバック」、12月は「学習評価」がテーマである。

9月は、C. Thorn 先生が R. Ellis の“task based teaching and learning”を軸に、「意味」に重点を置いたタスクについて講義を行った。専門家の理論や参考文献を引用した上での現状分析や具体的なタスクの例の解説に意義を感じた。また、講義で言及されたフォーカス・オン・フォームについて、詳しく自分で調べるきっかけとなった。

第5節 自学自習コース(CLMS)

研修参加者は、オンデマンド方式の CLMS を使用して、三つのコース(1. The Role of the Teacher, 2. Developing Speaking Skills, 3. Developing Writing Skills)から、二つを履修しなければならない。概ね4時間かけて修了すると、それぞれのコースから修了書が発行される。修了書は、ポートフォリオと一緒に担当チューターへ電子メールで提出する仕組みだ。コースには、英語教授法の専門家である C. Thaine 先生による講義の動画



やクイズが組み込まれており、予想以上にテンポよく学習を進めることができた。各自が CLMS にログインして学習するため、何度でも復習できる点、また途中まで学習した記録を保管できる機能がついている点が便利である。

Developing Speaking Skills のコースでは、集合研修と同じく、「流暢さ」を目指した効果的なスピーキング指導について学んだ。Developing Writing Skills では、ライティング指導を「文」の単位で行うのではなく、スキヤフオールディングと呼ばれる足場かけによりスモールステップでサポートし、様々な形態の英作文に取り組む指導について学んだ。

第6節 ポートフォリオ

計 18 ページのポートフォリオへは、自分が伸ばしたい英語指導のスキル、対面オンライン研修や Webinar で学習した内容の振り返りや学びを自分の実践にどう取り入れていくかという考え、他の参加者とディスカッションした際の気づきを、自分のペースで、パソコン上で書き込んでいく。11 月と1月の計2回、担当のチューターに電子メールで提出すると、後日チューターが添削した上で返送してくれる。筆者のチューターはアルゼンチン在住だったが、時差があるにも関わらず、ポートフォリオに関する質問へ、いつも迅速に返事をくれた。チューターの添削は、参加者の書いた内容に対し、四つの観点(1.スピーキングとライティングのコンセプト理解、2.クラスルーム・リサーチ技術についての理解、3.この研修での学びの応用、4.まとめ)について1ページに詳しく記入してくれた。添削される側になり、生徒の立場でチューターのコメントを読んでもみると、生徒の課題には、取り組んだ時間と努力に報いるよう個別のフィードバックを与えることの大切さに改めて気づいた。課題のやりとりを通じ、生徒とコミュニケーションを図り、励ますことは、モチベーションを上げる力がある。

第3章 課題と展望

H. Reinders は、英語教育がうまく進むか否かの鍵の一つとして協働(コラボレーション)を挙げ(Reinders 2017: 22)、A. Burns and J. C. Richards は、教員が個々に力を発揮するだけでなく、教員間、教員と研究者、教員と生徒の三種のコラボレーションにより、効果的な英語教員開発がなされると説明している(Burns and Richards 2009: 242)。研修の学びをそれぞれの参加者が自らの実践に取り入れ、学びを発展させるために、研修における教員間のコラボレーションが助けとなるだろう。今回の研修にチューターや他の参加者に共有する協働活動があれば、Buddy system がさらに活発に利用される可能性がある。例えば、Buddy 間で伸ばしたい指導力の共通テーマを設け、それぞれが授業案を作成し授業を行い、気づきを相互にフィードバックし、チューターや他の参加者に共有するという協働活動。Zoom を利用して参加者がマイクロレッスンや、Buddy と TT を行うことを課題の一つにするという例も考えられる。大人数の研修では難しいかもしれないが、研修参加者の中で、さらに希望者を募って実践することから始めても良いだろう。

今回の研修については、内容そして運営側やチューターのレベルが高く、参加できたことに感謝している。このような研修に、研修会場に移動する時間とコストを節約しながら職場や自宅から参加できたのは、オンラインで開催されたお蔭である。今後も、半年の研修での学びと気づきを、生徒に還元していけるよう努めていきたい。

参考文献

Burns, A., and Richards, J. C. (Eds.) (2009). *The Cambridge guide to second language teacher education*. New York: Cambridge University Press.

(Kindle)

Cambridge University Press (2021). 教員研修プログラム

<https://www.cambridge.org/teacher-development-programme/cambridge-teacher-development-programme> (2021 年 1 月 17 日)

Reinders, H. (2017). Moving from teacher resistance to teacher leadership. *Modern English Teacher*, 26(3), 20-22.